様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2021
課題番号：１６Ｋ０４２９９

研究課題名（和文）多様な児童集団をあたたかく突き放す教師の学級経営方略の効用：自律型学級集団の醸成

研究課題名（英文）The effectiveness of teachers' "warmly pushing away" classroom management strategies in diverse classes: Fostering autonomous classroom groups.

研究代表者
弓削　洋子（YUGE, Yoko）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：８０３３５８２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，多様な児童で構成された小学校学級を自律的協同的集団に醸成する教師の学級経営方略として「あたたかい突き放し」の可能性を，フィールドワーク，集団討議実験，質問紙調査を通して検討した。
　その結果，多様な学級のなかでも，学級集団の分断基準がひとつで学級が二分されるのではなく，分断基準が複数であるため学級を単純に二分できない学級のとき，教師（役）は，児童の諸特性に配慮した共通目標にむけて児童を突き放す，「あたたかい突き放し」が効果的であり，また必要であると判断した。背景には，児童らの特性のばらつき故，教師は集団としてのまとまり形成の必要性とコントロールの困難さを感じたためと推察される。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　学術的意義として，まず，先行研究では未検討であった多様な学級集団に効果的な学級経営について，「あたたかい突き放し」の可能性を提起した。加えて，多様性パターンやfault lineといった組織心理学の知見を学級集団研究に組み入れることで，学級の多様性の種類と学級経営の関連を検討できる可能性を提起した。
　教育実践上の意義として，発達障がいなど様々な特性の児童が在籍の学級集団の経営として，「あたたかい突き放し」を教育現場に提案できる。従来，多様な学級集団の経営の困難さが指摘されるのみであった。本研究の成果は，多様性パターンも含めて効果的な学級経営を提案でき，学級編成も含めた教育実践の一助となる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the possibility of "warmly pushing away" as a classroom management strategy for teachers to foster autonomous cooperative groups in elementary school classes composed of diverse students. The "warmly pushing away", like "detached concern", is a classroom management strategy that leaves decision-making on task orientation to the children, with consideration for them. Data was collected through fieldwork, group discussion experiments, and a questionnaire survey from teachers and undergraduate students. As a result, we indicated that " warmly pushing away" is effective and necessary in diverse classes where the class cannot be simply divided into two because there are multiple criteria for dividing the class, rather than a single criterion for dividing the class group. The mechanism is assumed that the variation in children characteristics made their teacher felt the necessity of forming a group cohesion and the difficulty of controlling them.

研究分野：教育社会心理学

キーワード：教師　指導行動　学級経営　多様性　あたたかい突き放し　自律性　小学校　fault line

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ここ数年，日本の学校教育の課題のひとつは，児童生徒の「多様性」を生かした教育である。社会のグローバル化が進むなか，児童生徒が多様な個性を互いに認め合いつつ個性を生かして活躍できる自律・共生の場を，学校は提供することが求められる。特に，小学校教師は学級経営を基盤とした教育をおこなう役割であり，児童の多様性を前提とし，各自の多様性を生かした学級経営を展開することが必要である。

翻って，従来の教育・社会心理学研究では，学級経営上，教師は，能力などの資源が異なる児童を公平に受け入れつつも，児童の資源の違いを評価することで児童集団を階層化せざるを得ない心理的構造的矛盾と難しさを抱えていると指摘されている。しかし，このような学級経営の難しさを，いかに解決するかに取り組んだ研究は数少ない（e.g.,蘭・高橋，2008)。特に，学級経営における上記の難しさの解決を学級集団の多様性を対象にして検討し，児童集団と個人の自律性発達のメカニズムについて提案した実証研究はおこなわれていない。

加えて，集団の多様性の基準や多様性のパターンが及ぼす効果の検討は，組織心理学研究で取り組みが始まっている一方で，教育集団に関する研究では検討されていない。

本研究は，学級現場に立ち返って，学級集団の多様性と効果的な学級経営の関連に関する問題を検討・解決するものである。

２．研究の目的

以上より，児童のニーズや能力が多様な学級集団において，教師の学級経営の二つの役割「児童を公平に受け入れる役割」と「児童を評価する役割」は矛盾する。

本研究の目的は，矛盾した教師の役割を統合した学級経営方略として，児童の自律・共生に効果的な「児童集団をあたたかく突き放す」経営方略（弓削，2012）を検討することにある。この目的を検討するために，具体的には，以下の研究を設定した。

逸脱行動を取る児童（逸脱児）が在籍する多様な学級に関する自由記述分析（研究１），多様な学級の指導行動に関するフィールドワーク（研究２），学級の様々な多様性パターンが学級経営に及ぼす効果：集団討議実験（研究３），学級の多様性と一様性が学級経営に及ぼす効果：集団討議実験（研究４），学級の多様性と一様性が学級経営に及ぼす効果：質問紙調査（研究５）である。

最後に，研究１から研究５の結果から，「あたたかく突き放された」多様な児童の集団が，対等ながらも個を生かして協同する自律的な協同集団を醸成して，最終的に個の自律を確立する心理的メカニズムについて考察する。

３．研究の方法

（１）研究１　逸脱児が在籍する多様な学級に関する自由記述分析

①調査協力者　小学校教師 66 名，教職歴平均 16.3 年（SD=11.8)。

②調査時期　2015 年 8～9 月に質問紙調査を依頼し，調査を実施した。

③手続き　担任した学級のうち，逸脱児がいて印象的な学級のなかから，まとまりがあって積極的に学習や諸活動に参加した学級（積極的学級）と，まとまりがなく活動への参加が消極的な学級（消極的学級）に相当する学級を，一つずつ想起させ自由記述させた（逸脱児に関する記述，教師の関わり方，逸脱児と同級生との関わり方，児童同士の関係性，学級ルールなど)。

また，項目評定も実施した（逸脱児の行動の問題度，同級生との仲の良さ，学級連帯感，教師の指導行動，学級ルールなど)。いずれも，どの程度あてはまるかを 5 件法で評定を求めた。

（２）研究２　多様な学級の指導行動に関するフィールドワーク

①調査協力学級　以前から交流のあった A 教諭の配属先である小学校（関東地域の公立小学校）の通級指導教室。通級指導教室は様々な特性の児童が在籍しており，多様な学級といえる。

②調査時期　2016 年度から 2018 年度に年 2，3 回。2019 年度に 1 回。

③手続き　フィールドワークでは，できるかぎり教師の手伝いをしたり児童らと遊んだりして，教師の負担を軽減したり児童らに不安を与えないように努めた。記録は授業中にはおこなわず，休み時間や放課後に観察したポイントをメモし，教師と児童に「見られている」という意識を持たせないようにした。また，フィールドワーク後に，担任教師にインタビューし，通級指導教室の学級経営方針や児童への指導行動の意図や気を付けていることなどを話してもらった。調査実施に関しては，予め管理職及び教職員に目的や守秘義務について説明し，了承を得た。

（３）研究３　学級の様々な多様性パターンが学級経営に及ぼす効果：集団討議実験

①実験参加者　小中学校教師 61 名，教員養成系大学大学院院生 22 名および学部 3 年生 48 名。3～6 名程度でグループに分かれて，集団討議に参加した。

②実験実施期間　2016 年 7 月～2017 年 8 月である。

③手続き　様々な特性の児童を組み合わせた仮想学級について，学級の課題，児童同士の関係性，

必要な学級経営などについて集団討議させ，討議してまとめた意見をワークシートに記入させた。討議時間は，約１時間であった。
④仮想学級条件（多様性パターン）　仮想学級の多様性のパターンは，教師と児童の関係性および児童同士の関係から操作した。教師から受け入れられる児童と受け入れが難しい児童，同級生から受け入れている児童と受け入れが難しい児童の，計４つのカテゴリーに児童の特性を分け，児童のカテゴリーの組み合わせ方で多様性のパターンを操作した。多様性のパターンはHarrison & Klein(2007)の「種類」と「格差」，およびLau & Murnighan(1998)のfault line（以下，FL）を参考に，仮想学級パターンを４条件設定した。多様性大学級（Diversity: DI学級）は，４つのカテゴリーの児童で構成されている。「種類」大で「格差」が中程度，かつFL弱である。児童間の格差大学級（Pupil Disparity: PD学級）は，教師に受け入れられているが，同級生からも受け入れられている児童とそうではない児童に分かれている。「種類」中で「格差」大，かつFL中である。教師基準の格差大学級（Teacher Disparity: TD学級）は，同級生に受け入れられているが，教師からも受け入れられている児童とそうではない児童に分かれている。「種類」中で「格差」大，かつFL中である。２階層に分断している学級（High Disparity: HD学級）は，教師と同級生から受け入れられている児童といずれからも受け入れられていない児童に分かれている。「種類」中で「格差」最大，かつFL強である。
　仮想学級には，各カテゴリーからほぼ同数の児童を選出して計 8 名になるようにした。ただし，「人に暴力をふるうカズオ」のみ，全ての学級に配置した。
⑤教示　参加者には，これから小学５年生の仮想学級の学級経営を体験してもらうこと，メンバーで話し合って合意を得ることを伝えた。次に，仮想学級児童の30名のうちクラスの特徴をよく表している児童８名のカード，グループ活動用紙（１枚）をグループに渡し，カードを見ながら，児童理解や，この学級の課題，人間関係図の描写，学級経営案，学級経営後の人間関係，学級・児童の様子を話し合ってまとめるよう教示した。また，一部の研修会では，実験前に仮想学級についての学級経営の見込み（e.g.,学級経営が難しそうだ，担任の指示が通らなさそうだ，担任の負担が大きそうだ）の項目評定を求めた。

（４）研究４　学級の多様性と一様性が学級経営に及ぼす効果：集団討議実験
①実験参加者　教育学部学部生94名。3，4名でグループに分かれて，集団討議に参加した。
②実験実施期間　2018年９月～2018年11月である。
③手続き　研究３と同様である。
④仮想学級条件（一様性―多様性）　仮想学級の一様性―多様性の操作は，児童の学力と社会性の高さでおこなった。一様条件として，学力や社会性が高い児童のみ 8 名の学級（Top Uniformity：TU学級），または低い児童のみ８名の学級（Bottom Uniformity: BU学級）の２条件を設定した。多様性条件として，学力が高い児童と低い児童，社会性が高い児童と低い児童を２名ずつ計８名の学級（Diversity: DI学級）を設定した。グループ数は，TU学級７組，BU学級８組，DI学級12組である。
⑤教示　研究３と同様である。

（５）研究５　学級の多様性と一様性が学級経営に及ぼす効果：質問紙調査
①調査協力者　小中高学校教師17名および教職志望大学院生46名計63名。
②調査実施期間　2020年７月である。
③手続き　場面想定法の質問紙調査を実施した。小学５年の仮想学級として，研究４と同様の条件の学級を設定し，文章化した。各学級の文章を読ませ，当該学級の経営上，必要な指導行動の尺度評定と評定理由の自由記述，および学級経営後の各学級モラールがどう変化するかの尺度評定を実施した。いずれも５件法である。

４．研究成果
（１）研究１　逸脱児が在籍する多様な学級に関する自由記述分析
　自由記述内容は，KH Coder（樋口,2014）にて計量テキスト分析し，学級条件と自由記述内のコードの共起確率（Jaccard係数）を指標として，各学級に特徴的な逸脱児の記述，および学級特性や学級経営の記述を抽出した。その結果，積極的学級では，逸脱児を同級生が受け入れ，児童リーダーとともに外で遊ぶ集団活動が特徴であった。また，教師は配慮的・肯定的接し方をし，人の話を聞くという促進的な学級ルールを設定していた。一方，消極的学級では，同級生は逸脱児と一緒に遊ぶが距離をおくこともあり，児童間での勢力差や分断が特徴であった。教師中心の指導であり注意叱責が特徴的で，～をしないという抑止的な学級ルールであった。項目評定の結果は自由記述の結果を裏付けており，特に，積極的学級は，学級の連帯感，教師の指導行動「任せる・突き放し」，「配慮」，児童に見合った共通ルールの評定値が消極的学級に比べ高かった。

（２）研究２　多様な学級の指導行動に関するフィールドワーク
　守秘義務上，ここでは要約を紹介する。学級には個性の児童がいること，ただし，共通課題として，頑張りすぎてしまう点とまわりの児童との協力関係形成が難しいことが課題としてあった。そこで，教師は，児童への配慮として，ひとつは，児童間で各自の特性をわかりあえる取り組みをしていた。例えば，配慮行動として，特定の児童が苦手であるとわかっている行動をみん

なの前で尋ねることで，当該児童に配慮するだけでなく他児童にも配慮を促す「あたたかい」指導をおこなった。加えて，児童らに共通の課題を学級活動や作業のルールにすることで，多様な児童全員に配慮した共通ルールを設定した。このように，教師は児童に配慮した共通のルールを与え，あとは，作業のルールの確認は児童たちに任せたり協力しないとできない作業をさせたりして，自ら相手にお願いしないといけない状況を設定した。児童らにとって自分事となる「あたたかい」課題に向けて教師は「突き放し」をおこなっていたといえる。加えて，教師は，最初の段階で，禁止事項ではなく，してほしいことをルールとして伝えていた。学級では予想外のことが起きたが，次第に児童同士で協力したり我を通そうとしなくなったりした。例えば，道具の片づけの際に，児童らが自分の使った分だけ片付けて立ち去ろうとしたが，教師はあえて黙る「突き放し」をすると，片付け終わっていない同級生の片づけを手伝いはじめるようになった。また，遊びの既存のルールを受け入れるのが特性上難しい児童がいたときも，他の児童が，既存のルールとは異なるがその遊びを継続できるルールを瞬時に編み出して，みなで遊びを継続した。

（３）研究３　学級の様々な多様性パターンが学級経営に及ぼす効果：集団討議実験

討議の結果（Table1 参照）からは，第一に，学級を二分化させる多様性パターン（PD,TD,HD）の学級課題が「暴力をふるうカズオ」中心であるが，学級を 4 分割させる多様性パターンの DI 学級の課題は，カズオに特化せず全体的課題や教師の負担感を取り上げている。また，学級経営案も，前者は教師中心の配慮や関係づくりであるが，後者は児童集団中心である。教師が干渉せずに，学級全員が公平に参加できる協同の場を与え，かつその場で自主的に児童たちに判断させる，いわば，児童同士対等な関係になる配慮が伴う「あたたかい突き放し」の提案である。

項目評定の結果は，TD 学級のほうが PD 学級よりも，個性的な子が多い（$F_{(3,22)}$=4.74, p <.01），学級で諸問題が起きそうだ（$F_{(3,22)}$=5.85, p <.01）と評価していた。

（４）研究４　学級の多様性と一様性が学級経営に及ぼす効果：集団討議実験

討議の結果（Table2 参照）からは，第一に，学級課題は，同じタイプの児童がいる学級（TU,BU）の場合は当該学級の児童の特性に拠るものであるが，多様学級（DI）の場合は，児童間の関係性の問題であった。第二に，学級経営案は，同じタイプの児童がいる学級（TU,BU）は，教師中心

Table１　多様性パターン学級ごとの集団討議の結果

	学級の課題	学級経営案	学級経営後の変化
PD学級	・カズオ中心の問題 ・カズオと教師に依存的な子の分裂 ・自主性欠如	・教師中心の指導 ・個別配慮 ・暴力をふるうカズオへの対応を中心 ・グループワークで関係の固定化解く ・課題を一人でやりこなさせる	・自己肯定感 ・教師に頼らなくなる ・カズオに優しくなる学級
TD学級	・カズオの暴力 ・女子と男子の教師への反抗的態度 ・リーダーの孤立	・教師中心の指導 ・教師と児童との関係づくり ・気がかり児と同級生との関係づくり ・全員活躍の場（行事など）を設定	・児童間の関係性の改善 ・カズオがリーダーになるなど，学級の一員に
HD学級	・評価が低い児童個人の問題（特に，カズオの暴力）	・教師中心の指導 ・個別対応とルール徹底 ・気がかりな児童たちに活躍の場	・暴力が減る ・問題が全て解決するわけではないが，学級が落ち着いてくる
DI学級	・全ての児童個々の問題 ・学級全体にまとまりなし，孤立化の問題 ・人間関係希薄，二分化 ・リーダーとなる子どもや教師の負担大	・児童集団中心 ・みんなで解決，全員参加の授業 ・クラス全員で学級ルール決める話し合い ・みんなで協力して達成できる課題設定	・暴力が減る ・互いを認め合う ・自分をコントロールできるようになる

Table2　仮想学級ごとの集団討議の結果：一様学級と多様学級

	学級の課題	学級経営案	学級経営後の変化
TU学級	・優越感の高い児童 ・クラスで浮く ・一体感がない ・積極性なし，依存的	・教師中心の支援 ・個々を尊重 ・自分の意見を言えるようにする ・まわりの意見を聞けるようにする	・協力し合う関係に ・団結力が出る
BU学級	・授業が円滑に進められない ・暴力，暴言 ・自己主張強い ・生活面の問題	・教師中心の指導 ・学習面などの個別対応 ・基本的な生活態度のルールを教師が設定	・コミュニケーションが活発に ・授業が進むようになる ・学校に来られるようになる
DI学級	・学力差 ・けんか ・孤立 ・リーダータイプ児童が浮く	・ペア学習で教え合う ・グループ活動で協力し合う ・クラスで問題解決する話し合い ・個々に役割を	・相互理解が進む ・子どもたちで問題解決できる

Table3　各尺度評定得点：平均値（標準偏差）

	教師の指導行動			学級モラール		
学級	突き放し	指示注意	配慮	学習意欲	自律協力	落ち着き
TU	3.62(.72)	2.36(.71)	4.27(.54)	3.61(.81)	4.25(.51)	3.34(.89)
BU	2.44(.75)	3.86(.80)	4.58(.54)	3.07(.63)	3.33(.66)	2.75(.88)
DI	3.14(.62)	3.37(.77)	4.51(.48)	3.58(.65)	3.92(.58)	2.98(.87)
$F_{(2,124)}$	68.3***	99.4***	13.6***	18.2***	64.2***	9.94***
	TU>DI>BU	BU>DI>TU	BU,DI>TU	TU,DI>BU	TU>DI>BU	TU>BU,DI

の指導・支援や個別対応が主であった。多様学級（DI）は，ペア学習，協働活動や話し合いを児童に任せるものであり，児童の能力の違いを活かしつつも児童同士対等に参画できる，配慮を伴った「あたたかい突き放し」であった。

（５）研究５ 学級の多様性と一様性が学級経営に及ぼす効果：質問紙調査

３学級間を比較するために，対応ありの１要因分散分析をおこなった結果（Table3 参照），TU 学級は「手放し」，BU 学級は「指示注意」と「配慮」，DI 学級は「突き放し」と「配慮」の学級経営が必要と判断された。また，学級経営後の学級モラールの結果からは，TU 学級は「学習意欲」「自律協力」「落ち着き」が高く，成熟した学級に，DI 学級は「学習意欲」「自律協力」が高く，自律的で活発な学級になるとの判断であった。BU 学級は「学習意欲」「自律協力」が低く「落ち着き」のない学級になるとの判断だった。

（６）「あたたかく突き放された」学級経営による多様な児童の集団の自律的協同集団醸成

研究１から研究５の結果からは，学級集団の多様性に対する教師の学級経営，学級集団の自律性および協働性醸成に及ぼす影響について，以下の成果が得られた。

第一に，多様な児童の学級集団において，教師は個々の児童に配慮的指導をしつつも，多様な児童に共通の課題や目標を見出して学級経営をおこなうことが効果的である。特に，行動を抑止するよりも目標に向かわせる促進的ルールが，多様な児童集団の自律的かつ協働的活動をもたらすといえる。

第二に，研究３，４，５の結果は，学級が二分されている多様学級や児童の特性が一様な学級に比べ，学級を構成する児童のカテゴリーが多くかつ fault line が弱いパターン（研究３～５の DI 学級）の学級のとき，「あたたかい突き放し」の学級経営をおこなうことで，個の特性を活かした自律的協同的活動を促す可能性を提起している。

第三に，DI 学級のような多様学級への「あたたかい突き放し」の学級経営が，自律的協同的学級集団醸成をもたらすメカニズムの提起である。

研究３，４の結果からは，多様パターン DI 学級の課題は，児童の特性がばらついているためまとまらないことと，児童の孤立である。学級内を明確にサブグループ化できる基準があいまいで児童間のまとまりがみえない状態が，かえって，学級集団を経営する立場の教師に，集団として全体をまとめようとする力を作動させたと推察される。まず，特性が異なる児童を集団としてまとめるうえで，全児童の特性を理解し共通の課題を教師は把握する。そして，その課題に全ての異なる特性を持つ児童を参画させて，まとめていこうとする。しかし，児童らは特性にばらつきがあり，児童たちをどのように参画させたりまとめたりしていいかのコントロールは，自分だけではできないと教師は捉えるのではないだろうか。そこで，共通課題にむけて児童を突き放すことで，児童らに課題遂行の方向付けの具体を考えさせて実行させる，いわば教師としての課題方向付けの役割を児童集団に手放すと考えられる。その結果，児童は特性を活かして自律的に，かつ共通課題のもと協同的に活動することが，研究１，２の事例から推察される。

一方，児童集団が明確に二分される学級や，同じタイプの児童の学級の場合は，児童の特性を説明する基準は明確且つ一つである。研究３，４の当該学級の課題も，児童の特性に応じた課題が挙げられている。教師は，この一つの基準によって児童を一元的に指導する教師中心の学級経営をとることが可能と判断すると解釈できる。

（７）得られた成果の研究上の位置づけと教育実践上の意義，および今後の展望

従来の教育社会心理学研究では，多様な学級集団において，いかに児童を公平に受け入れつつも児童の資源の違いを評価する学級経営が可能かの検討は数少なかった。この問題に対し，本研究の成果は，仮想学級による実験や質問紙調査ではあるが，「あたたかい突き放し」の学級経営の可能性を提起するものである。また，先行研究では，「あたたかい突き放し」は高学年学級に効果的であり，高学年の自助資源が高いためと説明していた（弓削,2012；弓削・楞野,2020）。しかし，本研究の成果と併せみると，高学年は，個性や資源の違いが明確な時期であるため，「あたたかい突き放し」が効果的であるとする，先行研究にはない，新たな解釈が可能になる。

また，小中学校などの学校教育集団の多様性について，組織心理学研究で注目されている多様性のパターンや fault line から検討した研究はおこなわれていない。本研究は，組織心理学研究の多様性の知見を学級集団研究に組み入れることで，学級の多様性の意味を操作的に定義し，学級経営との関連を詳細に検討できる可能性を提起するものである。

さらに，教育実践上の意義として，本研究は，発達障がいなど様々な特性の児童が在籍する学級集団の経営として，「あたたかい突き放し」を教育現場に提案することを可能にした。従来は，多様な学級集団の経営の困難さが指摘されるのみであった。本研究の成果は，多様性のパターンも含めて効果的な学級経営を提案することで，学級編成も含めた教育実践の一助となる。

最後に，今後の展望を示す。第一に，実際の学級集団の多様性と学級経営との関連，およびその効果性の検討をおこなうことが挙げられる。新型コロナウィルスによる影響のために，予定していた小学校児童および教師対象の質問紙調査の実施ができなかったためである。第二に，メカニズムを実証するための，集団実験および質問紙調査の実施が挙げられる。そして，第三に，本研究の知見をもとに，学級コンサルテーションなど，多様な学級集団の学級経営に困難を感じている若手教師の学級支援を実施することである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 弓削洋子	４．巻 71
２．論文標題 小学校教師の指導行動分析研究におけるカテゴリー化の課題 ― 教師－児童の相互作用の様相に注目して ―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 愛知教育大学研究報告（教育科学編）	６．最初と最後の頁 41-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 弓削洋子・楞野祥子	４．巻 41
２．論文標題 学級の遂行資源の高さと教師の指導行動の関連の検討：場面想定法を用いて	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学校教育学研究論集	６．最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 弓削洋子・後藤倫美	４．巻 67
２．論文標題 児童の逸脱行動が問題視される学級集団特性の分析	５．発行年 2018年
３．雑誌名 愛知教育大学研究報告（教育科学編）	６．最初と最後の頁 25-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 弓削洋子	４．巻 18
２．論文標題 学級のアセスメント②教師の指導スタイルと学級経営の見立て	５．発行年 2018年
３．雑誌名 子どもの心と学校臨床	６．最初と最後の頁 72-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 西中華子・依藤友希・山口 恵・菅原 由美子・弓削洋子・赤木和重
2．発表標題 小学生が居場所をもてるようになるためにどのような関わりが必要なのか:チーム学校をキーワードに，現場の実践から考える
3．学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4．発表年 2021年

1．発表者名 弓削洋子・杉森伸吉
2．発表標題 小学校教師の指導行動が児童のスキルに及ぼす効果:教師への関係欲求を媒介変数としたモデルの学期間比較
3．学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4．発表年 2020年

1．発表者名 弓削洋子
2．発表標題 学級の多様性が教師の学級経営に及ぼす影響に関する予備調査―場面想定法を用いて―
3．学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 弓削洋子
2．発表標題 児童の教師への関係欲求と効果的な教師の指導行動の関連性：大学生による学級評定からの検討
3．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4．発表年 2019年

１．発表者名 YUGE,Yoko
２．発表標題 Do Japanese Classroom Teachers’ Instructional Behaviors Facilitate Learner Motivation?
３．学会等名 American Psychological Association Convention（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 弓削　洋子
２．発表標題 自律的協同学級集団形成を促す学級の多様性の特徴と課題に関する探索的調査：自由記述の分析を通して
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡田涼・宮前淳子・有馬道久・一柳智紀・岸野麻衣・弓削洋子
２．発表標題 自主企画シンポジウム：教育心理学からみた教師の成長と変容
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 弓削洋子・齋田裕香
２．発表標題 教師との関係形成における児童の主体性が学級適応感に及ぼす効果についての予備的調査：道具性と情緒性の２機能を考慮して
３．学会等名 日本教育心理学会第59回総会
４．発表年 2017年

１．発表者名 弓削洋子
２．発表標題 教師の２つの指導機能が児童の学習意欲に及ぼす効果のメカニズム検討
３．学会等名 日本社会心理学会第58回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 弓削洋子・齋田裕香
２．発表標題 教師－児童関係の類型と学級適応感の関連:関係形成の主体の所在と関係の道具性・情緒性の2次元からの予備的検討
３．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 弓削洋子
２．発表標題 気がかりな児童の問題視を規定する学級集団構造と学級経営の検討
３．学会等名 日本発達心理学会第27回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 弓削洋子・後藤倫美
２．発表標題 逸脱児童の問題視を規定する学級集団特性の検討
３．学会等名 日本社会心理学会第57回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 弓削洋子・後藤倫美
２．発表標題 逸脱児童の問題視を規定する行動特性と学級集団特性の検討：逸脱児童の対人関係を中心に
３．学会等名 日本教育心理学会第58回総会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

１．著者名 越良子・蘭千尋・青木多寿子・梅本菜央・藤村敦・角谷詩織・秋光恵子・南学・遠山孝司・西山めぐみ・奥村太一・弓削洋子・久保田愛子・石井幸江	４．発行年 2021年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 223
３．書名 教師になる人のための学校教育心理学	

１．著者名 有馬道久・大久保智生・岡田涼・宮前淳子・岸俊行・野中陽一朗・山森光陽・町岳・篠々谷圭太・金綱友征・牧郁子・弓削洋子・宮前義和・惠羅修吉・姫野完治・一柳智紀・岸野麻衣・吉田寿夫	４．発行年 2020年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 180
３．書名 学校に還す心理学	

１．著者名 大久保智生・牧郁子・弓削洋子・岸野麻衣・家近早苗・樽木靖夫・時岡晴美・水野治久・伊藤美奈子・松嶋秀明・澤田匡人・加藤弘通・岡田涼・赤木和重・藤澤文・安達智子・高木亮・金子泰之・高松みどり・瀧野揚三	４．発行年 2018年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 162
３．書名 教師として考えつづけるための教育心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関